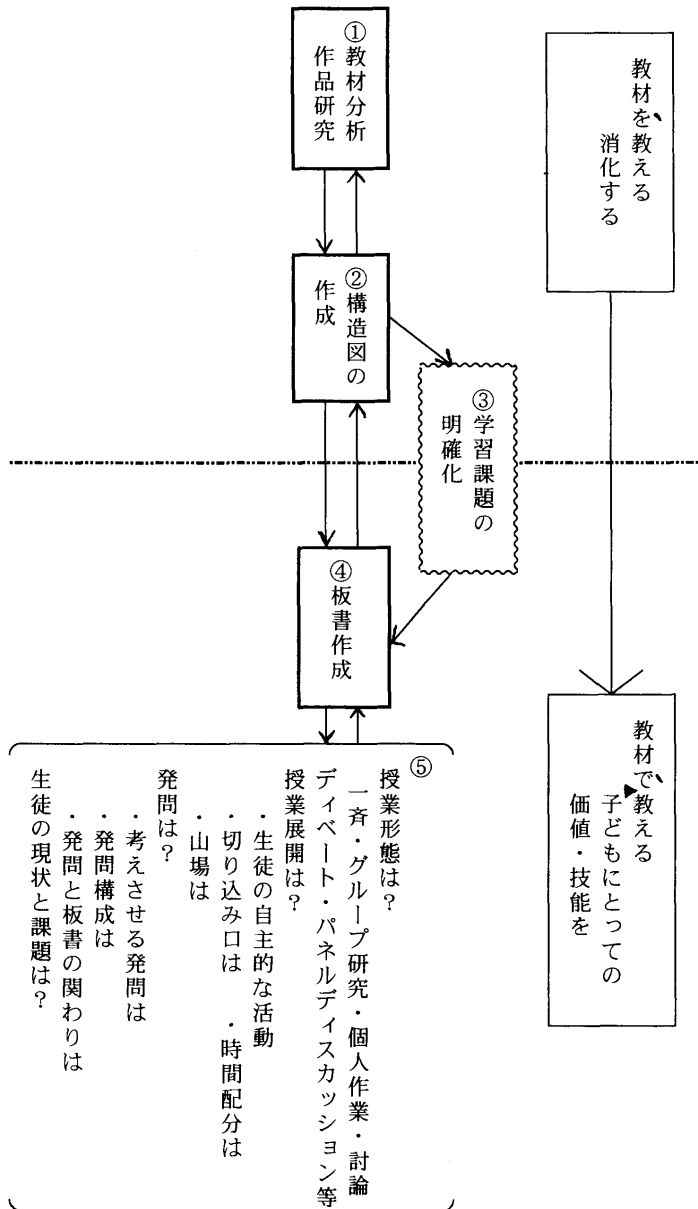


広島大学三年生を対象に、国語の指導について現場の立場から述べる機会があった。その時作成した図が左の図である。思考を明確にしていたり、学習課題を集約していったりするのに大変役立つものが、構造図であると考えられる。

【教材研究・学習指導案の流れ】



自分の考え

みんなの考え

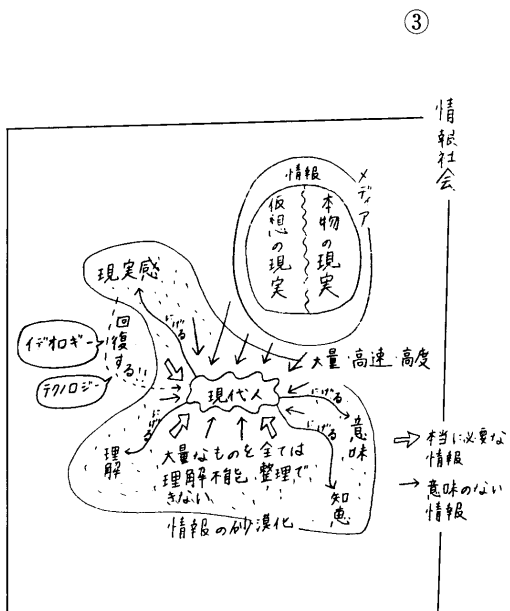
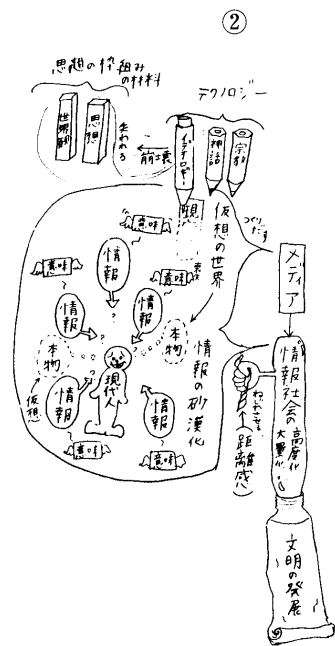
問一 インド人と日本人との心性の違いはなにか。なぜそんな違いがでてくるのか。

問二 筆者の言う「実体」とは何か

問三 昔はあった実体が、今なぜ希薄になってしまっているのか。

4 全体にプリントして紹介した三人の生徒の構造図

- ①は、絵画的要素を組み入れ、意味を雨に例え、イデオロギーの傘で防御していたのだが、たまらないでなくなってしまうというユニークなものである。
- ②も、絵画的要素が組み込まれ、宗教や神話は古いので鉛筆に例え、イデオロギーは新しいのでシャープペンシルにし、何とか、現実感を書こうとするのだけと書けない状態であることをうまく表現している。
- ③は、意味のない情報に押しつぶされかけている現代人の様子をアメーバのような形にしている。比較的図式化されている。



指導者がよい場面を捉えるなどすれば討論へ発展していく指導過程も設定出来ると実感された。

五 二つの実践から得られた方向性

① 意見の交流をめざす

今回の実践で出来たことは、意見を発表しあい、人の意見を聞き合う、それに感じ合うことだった。しかし、それは生徒個々の中、または瞬時のできごとであって、意識化は図れていない。今後、意見の対立、違いの明確化、まとめ合いなどの作用を、教員側だけでなく生徒同士が出来るように場の設定をしていかねばならない。

そのために、様々な意見を出し合える雰囲気作り、教室づくりを一年間、三年間を通してしていく、考える時間を作る、論理的な意見の述べ方の方法を知るなどの方策があろう。

② 多様な個別の表現活動を組み入れる

二つの実践とも、読解と絡めて文章を書く、声を出して発表する個の表現活動を組み入れた。今後、様々な場面を捉えて系統的にこういう学習を構成していく必然性がある。表現は一朝一夕には身に付かないし、いい文章に出会って手法をまねていくことで少しずつ自分の表現に近づいていくだろう。文種も様々なものにわたって書くべきで、書いたものは全体で評価していくことが必ず一学期に二、三回は必要である。

③ 個別学習、一斉学習を一時間の中で繰り返し

個別学習、一斉学習の繰り返し、組み合わせを一時間の中で構想していったが、その方法の多様性が考えられる必要性がある。今回はワークシートや意見文という方法を取ったが、批評文、レポート、メモなど様々な方法を今後系統立てていったり、工夫していくべきであらう。

④ ものの考え方、視点の拡充をさせる

生徒の意見文の内容が一通りで、筆者の意見のなぞりであったり、優等生的な意見にとどまっておき、個性的なもの、生活実感から生み出されたもの、視点の鋭いものが少なかった。これを打開するためには、情報を多く得ていくことや多読をしていく、様々な情報への意識化などをはかるべきであらう。一つの教材でできることではなく、日々の積み重ねの中で、そういう視点で盛りこんでいく必要があると強く感じている。

注

- 1 世羅博昭、「総合的な学習へ広がる授業構築の視点と方法―目標の二重構造化を図った国語科授業を―」、明治図書『教育科学 国語教育』、No.564、一九九八年、24
- 2 同掲書、21
- 3 授業で使用したワークシート（実際には二枚ある。）

学習プリント

「使い捨て文明の行方」(森本哲朗) 一九九八・九

I年 組 番 名前 ()

次に挙げている問題について、自分の考えをまとめてみよう。その時、根拠となる本文もメモしておくこと。

である。キーワードの意味を簡単に確認した後、以上の言葉を使ってその関係や作用を構造図で示すという課題を与えた。図式化することに慣れていない生徒が大半のようで、時間をかけずに出来る生徒と時間が多くかかる生徒の差が大きかった。順次机間巡視をして個別指導を加えた。構造図のパターンを分析すると以下のようになる。

〔1〕 矢印で順次展開を示していくもの

〔2〕 理科、数学の図式を取り込んでいくもの

〔3〕 絵画的要素を取り込んでいくもの

ただ、下位の要素、上位の要素の区別が明確でないものや、対立、並列などの関係がうまく取り入れられていないもの、一部分のみの構造図になってしまっているものなどがあつた。部分のみにこだわってしまい、全体が見えず、構造図へは到達しない生徒があつた。

実際に三人の構造図(注4)を挙げ、説明をさせながら順次本文に立ち返って内容読解を組み入れていった。三人の構造図を取り上げた理由は、ほぼ完成していたのと、個性的な部分があつたこと、パターンの違うものという観点からである。

意見文については、四百字以上という制限で書かせたところ、ほとんどの生徒が八百字程度に収まっていた。生徒の意見は大きく六つの観点に分かれたので、観点のみを書き出したワークシートを配布し、全体で意見交流会を実施した。生徒は聞きながら適宜ワークシートの空欄にメモしていくスタイルを取った。

生徒に示した六観点は以下に挙げる通りである。

- ① 仮想現実について、現実感の喪失している現代人の状況
- ② メディア発信側の問題点
- ③ 情報を受け取る側(我々)の問題点

- ④ 情報処理能力について
- ⑤ 情報の質について、情報の意味について
- ⑥ 情報社会のこれから

全員が発表していったのだが、他の生徒の意見と関わらせながら発表する生徒も見られた。

成果と課題

・抽象的な言葉など難解な語句を多く含んだ評論文の場合は、構造図を作成するという方法はかなり有効だと考えられる。私が作成した「教材研究・学習指導案の流れ」の図(注5)では「構造図」は②に位置しているが、指導者側で教材分析、指導案を立てたり、板書案を作成する時にも有効である。評論文の場合、生徒に構造図を作成させることを通して読解していく過程は、筆者の主張を読み取ったり、抽象的な部分の理解に役立つと考えられる。

また、今回は実施できなかったが、読解後の構造図の書き直しや自己評価、他者評価をする段階を組み入れていくことも必要であろう。そうすることで、構造をつかんでいく訓練にもなっていくに違いない。意見文を書く段階で、「何について書いたらよいかわからない」という生徒が若干いた。意見文を書かせる前に書くべき項目を提示しておく方が書きやすいように思われる。慣れていけば自分で着眼点を見つけられるはずである。

・意見交流会という形を取ったのは、討論などは成立しないだろうという指導者側の思いこみによるものであつた。しかし実際は生徒同士で他の生徒の意見に結びつけていったり、反対意見を挙げていったりして討論へ結びつけられる要素はいくつかあつた。意見を焦点化したり、

主張 「歴史を問い直せ」

切実さを増す

説得力あり

成果と課題

・発問形式で授業を進めた時は指名された生徒しか考えないため、意見の深まりもなく、何人に当てても沈黙が続いてしまう実態があった。今回はそういう状態は見られず、様々な表現が出て、読解に深まりが出た。教材が「実体」というキーワードに絞られていたため、この方法が役立った。

・評論文で筆者の個性的な表現を探すという授業は、あまり受けたことがなかったらしく、かなり新鮮な印象を持ったようである。文体の意識化は評論文でも必要だと考えられる。

・今回設定した五つの課題にも共通している部分が授業の中で発見され、課題の厳選の必要を痛感した。例えば問一と問三などは生徒の発言の中で重なり合う部分も多くあった。

四 構造図の作成を取り入れた授業展開

教材 「現実感の断絶」(清水克雄)―国語Ⅰ 三省堂所収―

対象クラス 広島大学附属高等学校Ⅰ年2組 40名

教材の特性

「現実感の喪失」「イデオロギー」「情報の砂漠化」など抽象的な語句が使用されており、内容理解に少し抵抗が感じられるであろう文章である。また、阪神大震災や湾岸戦争などの現代的な話題が入っている反面、現代生

四

活に浸りきっている生徒たちにとっては、筆者の言う危機感が感じられにくい面もある。さらには現代の抱える問題点の解決方法は全く示されていないので、「絶望的な」印象を与えることは否めない。その部分を踏まえて授業展開を考える必要がある。

内容としては、情報社会の中に生きる人間の自己存在の不確かさなど、自己のあり方について考えるきっかけとなる重要な問題を提起しているので、高Ⅰの生徒にとっては格好の教材となろう。

指導過程(八時間扱い)

- 第一時 通読をする。全文からキーワードの抽出をさせる。
- 第二時 キーワードを使って構造図を作成させる。
- 第三時 生徒の構造図を元に確認作業をする。
- 第四・五時 本文についての意見文を原稿用紙に書かせる。
- 第六・七時 意見発表をする。全体のまとめをする。
- 第八時 意見文の書き方について、プリントで要点説明をする。

授業の実際

キーワードを抽出していく作業については比較的スムーズに進んだ。キーワードについては事前に用意して模造紙に書いておき、生徒から出てくる順番に黒板に貼っていき、それ以外のものはその場で模造紙に書いて貼っていった。出てきたものとしては、

文明の発展、距離感、本物の現実、現代人、テクノロジー、イデオロギー、仮想の世界、情報の大量化・高速化、情報社会、情報の砂漠化、意味、現実感、メディア

授業の実際

学習課題の設定は、生徒から出てきた疑問点を中心に立てていく方法や、生徒自身に作らせていく方法、教師が与える方法など様々な方法があるが、今回は教師が与える方法をとった。理由は、生徒から出てくる課題は些末なものから鋭く核心をついたものなど雑多である上、問題の吟味、練成に多くの時間が費やされる割には実り薄いものとなる可能性があるからである。また、教材の特質として中心の課題はかなり絞られるものであったので、生徒から疑問点を出させて拡散するよりは最初から絞ったアプローチの方が効果的であると考えた。(ただし、教材によっては課題設定を生徒にさせた方が読解に役立つ場合もあろう。)

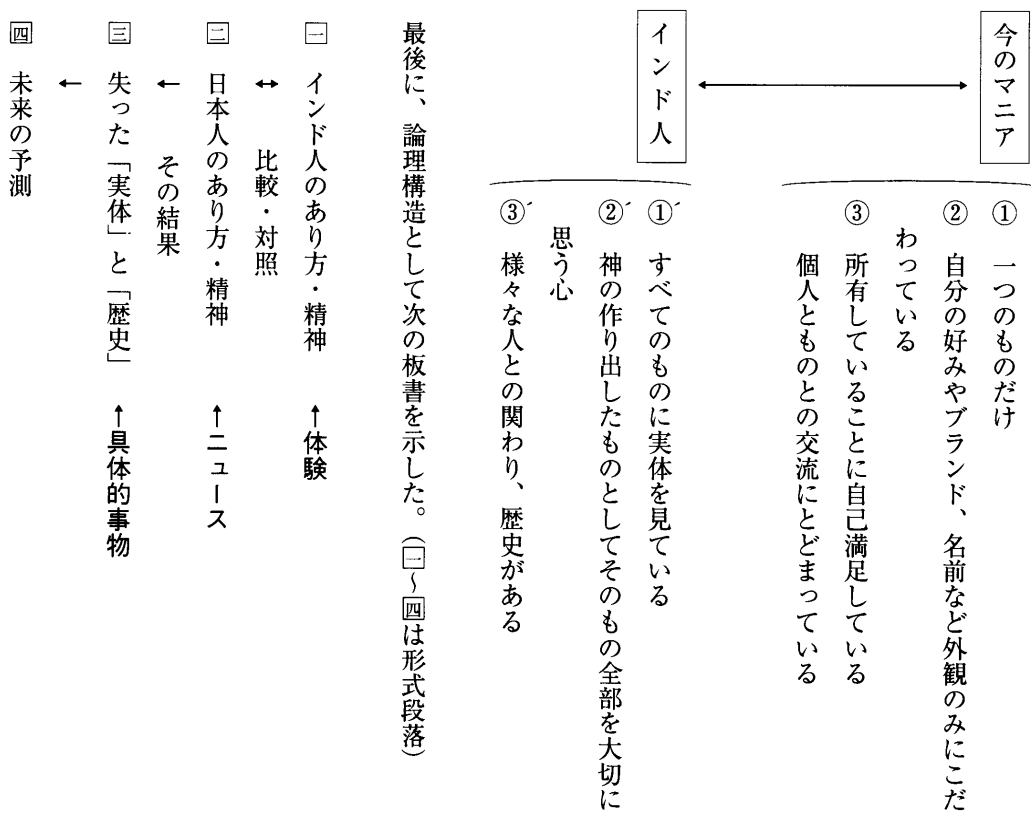
実際に準備した課題は次の五つである。

- 問一 インド人と日本人との心性の違いは何か。なぜそんな違いが出てくるのか。
- 問二 筆者の言う「実体」とは何か。
- 問三 昔はあった実体が、今なぜ希薄になってしまっているのか。
- 問四 「人間の使い捨て」が現れている事実をいくつか挙げなさい。
- 問五 なぜ今、筆者は実体を取り戻すため歴史を考え直すことを主張するのか。

ワークシートには上下に欄を設け、自分の考えを上にとり、下にはみんなの考えを聞いてメモしていくように指示した。必ず自分の考えを文章で書かせた後、一問につき十人は発表させ、授業者の方で板書しながら、まとめていった。実際は、みんなの考えの欄に板書内容を書いている生徒が大半だった。

また、ワークシート以外の問題として、授業展開の中で挙げた「日本

人のマニアといわれる人とインド人との違いは何か」を挙げた。板書は次の通り。



取り組む積極性も発問形式の授業ではあまり見られない。指名するとそれぞれの意見は言うし、自身の中には個性的な見解を秘めている生徒も多いはずなのに、授業では表面に出てこず（出させておらず）、沈滞ムードになる場面もある。

また、週二時間という制約の中で出来ることも限られている現実もある。その上、評論文、文学的な文章両方をこなそうというのは至難の技ともいえよう。ただそういう中でも、めざすべき授業像としては、生徒一人ひとりが思考する授業、自分の言葉で表現する中で、読解を深めていく授業、多くの生徒の意見が全体で真に交流される授業、自己存在について深く考えるきっかけを与える授業である。

そのための糸口としては、世羅博昭氏が示された

「①内容を問う発問をして、内容で答えさせる→②その答え（内容）を検討する過程で、語句・文章表現に着目して、その用法を学習させる（＝言語事項の学習）→③それによって、より深く内容を読み取らせる」（注1）という授業展開が参考となろう。個別学習、一斉学習の繰り返しの中で問題解決し、言語事項の学習も組み入れていくことが生徒一人ひとりに思考させることにつながるのではないか。

さらに氏は「学習者自身の生活の中から学習課題を発見させ、その学習課題の解決を目指して、必然的、有機的に読む・書く・話す・聞く活動を展開することが出来るよう、単元を構想し実践する必要がある。あるいはまた、単元の最終段階に発表会など、《表現の場》を位置づけて、学習者が発表会などのために、必死になって読む、書く・話す・聞く言語活動を展開するように、単元を構想し実践することが必要である」（注2）とも述べられている。

単元の構想については、時間数などの関係から常時実践していくことは無理であろうが、一年に一回は実施していき、それ以外の授業では一時間

の授業展開の中で言語活動を多く組み込んだ授業構想が必要である。

以上のことを踏まえた上で実践した、二つの授業展開を次に挙げる。

三 個別の学習課題解決を盛り込んだ授業展開

教 材 「使い捨て文明の行方」（森本哲郎）―国語Ⅰ 三省堂所収―
対象クラス 広島大学附属高等学校1年2組 40名

教材の特性

森本氏の旅行記などには、豊かな経験、知識に裏打ちされた味わい深い文章が多く見られるが、本教材も例に漏れない。「〜だった。〜だった。〜だった。」「〜ではないか。〜ではないか。」などの重層的な書き方、「人間の使い捨て」「実体」「歴史」など筆者独自の概念が盛り込まれた語句など個性的な表現が多く見られる。

また、インドでの自身の体験を切り口にして、日本人の使い捨て文明の問題点、「実体」が喪失してしまっている現状をわかりやすく述べている。未来の予測をした上で「歴史を問い直せ」という主張に流れる説得力のある論理構造を持っている。駅に備え付けられたコップの具体例など生徒の実感とはほど遠いものもあるが、内容自体は難解な語句も少なく、理解しやすいものだと考えられる。「実体の喪失」という主題を生徒一人ひとりが具象化できればこの教材を理解したといえるだろう。

指導過程（三時間扱い）

第一時 通読をする。ワークシート（注3）への書き込みをさせる。

第二時 ワークシートに沿って、発表させてまとめていく。

第三時 論理構成をつかむ。文体の特徴を探る。

高等学校における評論文の指導

— 個の表現・全体での交流を中心に —

三 根 直 美

はじめに

一昔前の定番であった評論教材が姿を消し、近年の教科書所収の評論教材は自然、科学、文明、文化、言葉など様々な主題を含んだ、現代社会にマッチした新教材が多い。それゆえか、今までの評論教材の特質であった論理展開のすばらしさ、重厚な文体などよりも、話題の斬新さ、着眼点の鋭さなどで目を引くものが多い気がする。これからの評論文の指導も教材の質の変化を見通した上で、それぞれの特性や利点、欠点を生かしたものに変わって行かねばならないだろう。

さらに、教育課程審議会の答申によると、「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め」「自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力」「目的に応じて的確に読み取る能力」の育成が重視されている。評論文でこそ、そのような能力の育成をしていけるはずなのに、大学受験に必要な技能面だけが生徒・教師の関心事で、真の生きる力となり得る評論文の授業の成立などはほど遠いのが現実ではなからうか。

技能面も身につけつつ、かつ思考する、知的興味がわくような授業を目指して、授業展開の工夫を挙げて提案としたい。

一 評論文における生徒のつまずき

評論文初読後の疑問点を挙げさせると、

- ① 抽象的な語彙の意味
- ② 比喩表現が指し示すもの
- ③ 論理の飛躍がある場合、そのつながり
- ④ 具体例の持つ意味、役割
- ⑤ 筆者が説明不足である部分や具体例がない部分の具体化
- ⑥ 題材に対して予備知識が少なく、書かれている内容自体が理解しにくい

などですみずいている場合が多い。①②④などは、主題よりも、部分にこだわり過ぎてわからないと感じている生徒が多い事実を示している。また、③⑤⑥は教材の質にもよるところが大きいが、評論文のような論理的な文章を読み慣れていないことから来るものだとも考えられる。

以上の部分について、理解を助けるような手だてを考え出し、ていくことが授業展開上必要である。

二 評論文の授業における問題点とめざすべきもの

週二時間現代文を担当している対象クラスの生徒はいわゆる真面目で、提出物も確実に集まる。ただ、みんなで仲良くという意識が強いからか、自ら発言する生徒も少ないし、意欲的に